

明治
一
西
京
茶
店
記
下

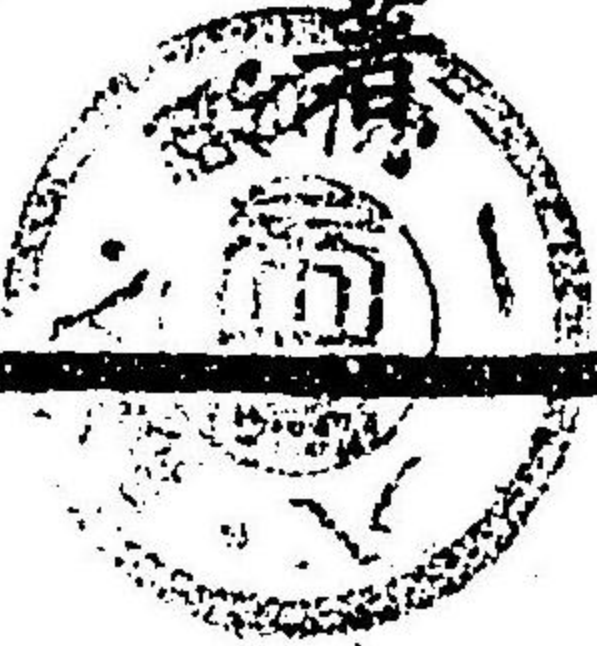
55
53

明治新撰西京繁昌記初編下

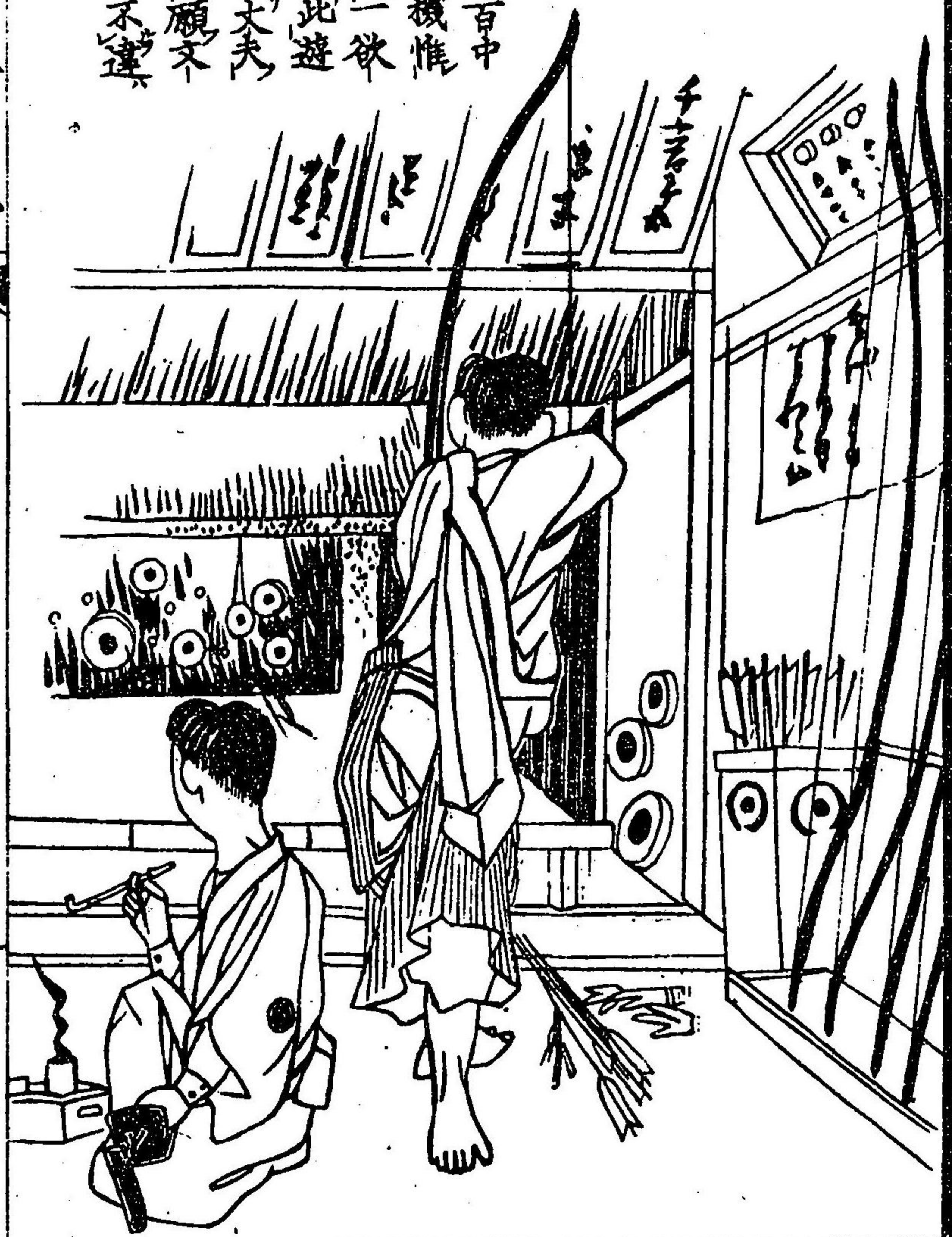
丹波綾部 増山守正著

大弓

大弓店を播山といひ柴山といひ龜山といひ文山といひ
 不抑弓の黄帝の臣揮といひ人始めて之を作り矢の同
 下世小夷年といひ人之を作るとぞ禮記曰く射る者
 進退周旋必也禮の中る内志正しく外體直くして然
 後弓矢を保つ審固あり弓矢を持つ審固ありて然
 ちて後以て中るをいふべし又曰く射ハ男子の事か
 ると古法よ安土ハ十五間あり一尺二寸の的懸くと
 いふ弓の六分を一人張りといひ一分上りよ一寸を五



百發百中
心有機惟
精惟一欲
情微此遊
真似大夫
戲唯願不
明的不違



百發百中

精惟一欲

情微此遊

人張りといふとかや我國弓の武士道の第一として
とる中よ就ては名人の義家頼政為朝宗高等を最
なを又其中の強弓の為朝小一て一寸二分を響とい
ふ是定則の七人張りより振古より比類是れあき強弓
あり宗高の精是ま亦源平晴之の戦ひは海へ馬上で
乗込で扇の要射て落を古今獨歩の名譽あり武神を總
て弓矢神武士を弓矢の家抔といふも武藝は冠たる比
稱といふぞ一其實の射を賣るふと、いふやうな賤
き業は非まど時勢變革輕便の武器様々は蜂起する故
小弓矢も相廢は次第小移る文明小戲は事不歸一終り
遂は全く商小落つ的ハ尺二の其外は中小錯雜金の
も

百發百中

精惟一欲

情微此遊

加へて的の數多く中らざといへ共的の遠からず左を射まの右へ中り大を現つたを小へ中る反れても中り外れても中る御客の胸の内愉快の中至繁昌此的の中るが第一と心を籠め一的の數去て共道の志氣の矢を折まど撓まぬ勉強此弓小番ふて彎絞り未ど發たぬ不偏不倚至大至剛小躍如る中うら切て放しとる其正直比矢先ふて道の正中理の至極射貫きたる萬物の事々各々よ感通し天地位一萬物も育る中和性情の真面目の標的を失はざるを要する

浮之節

或人曰チヨンガレといハ書をなうらざるの名と或人曰

長浮之節といふの義と僕曰く略して浮れ節と稱して可ならん然りといへ共長と稱する一理あり其發語不於るアと聲を引く事長きふて知るる一僕の浮之節と略して世の歌謠の心氣を浮す者此第一と云る者ハ凡そ人心を發揚する者千萬是を過る者あり其業ハ賤の賤ある者ふして從來人々席を列るを忌む而して明治以來平民は列を亦維新の徳澤といふる其嚴を引く長きあり短きあり高低清濁抑揚頓挫悉く其曲節を盡しはる無く貴賤貧富老若男女總して之を嗜好せざるあり其言極めて概雜其口最闊熟其場中床几を安置し客の來つて倚る小任を其他行客待み聞く是を

聽客進退去來の輕易に便を其音節の升降妙小人を
 て感動せしむ是を以て聽客圍擁耳を傾け心酔ふ浮
 老節の黨交互來て其錢を收る者幾ど隙か一狡黠の者
 あり收る者來まへ去り收る者去れへ又來る去來交互
 出沒一遂に高座より風評せしむを報然紅を朝して去る
 又是より及一故に豪俠の氣を飾り四五錢或は壹朱と與
 ふ收る者高く捧げて高座に示し高座の人慇懃之を謝
 して聽客に示し蓋衆の之に似る有ん事を振起鼓舞を
 るあり施主驕氣面よ溢る傲慢三尺鼻高きの状あり談
 者戲言を吐て曰コリヤヤ鈍太郎汝ハ全體義理知ら
 ズイツゾヤ内一來之時小旦那一生の御願ひでゴザリ



引朋聚類十餘名

三線敷清停客行

戲語穢言無不至

發揚千辯

萬憂情

マス二三升御米を借して下さらば直に算膨致しまは
 と四升らあう云ふ故小借してやつ多し五升ふもあら
 ぶかと貸してやつたら六升ふ目小逢わしなああ七八
 置ても今九升全體汝ハ一斗頃まで待たぬおや此様は
 早稻をかゝして催促させる錢ぢやあは中手も入まじ
 興手らしく又カス奴と催促あうまて是非もあく體一
 面五體どくめの断つて申し米屋の且那さぬ貴君の様
 小サウ天窓からガミくとオツシヤライでも鬢の分つ
 と晰おや者額や眉毛の借りでハあー現在眼の先に見
 へまゝと借錢の義でコザリマス私も貴君の御顔を見
 る度小鼻々迷惑仕り齒々と思ひまは喉つと此間御待

なされて下さらば乳ちつとむる臍をくと思ひまは去
 ま共私ハ兩手の指の如く家内も大勢の事故脊中ハ腹
 ハ換つらま首小掛るやうか錢設とても能う致しま
 せん手足は任せ持ぎ出し一分釐毫忽文明小開化皆納仕
 る杯と口から出放題調子小衆て佳境に入り談者錫杖
 を振り折らんとし三味線弾き腕を撥ひ落さんとて聴
 客我を忘まで忙然たる丁稚も主用を缺き婆も念佛を
 怠る傘ハ傘の中て謝し脚ハ脚を踏て詫ぶ日漸く沈む
 談者殿を停めて聴客も謝し聽客離散恰も蜘蛛の子を散
 らまの如く雜選頭ハ寂寥の境は化し暮風空床を吹く

三級酒樓

三級の酒樓兩所あり萬丸といひ大六といふ亭々衆屋
 上より突出し東山三十六峰より比叡愛宕此諸山悉く寸
 眸に歸せざるあり若し夫を東山月を吐時ハ則京城十
 萬家稠密瓦屋恰る波濤の起伏する如く乾坤一碧身の
 方小舟裏小在るが如くみて東坡赤壁飄然の觀ふ比を
 なき無盡藏真の清風明月此寶の價無き遊ハ樓上千來
 萬客ハ新陳交代絶間なく所謂天地ハ萬物の逆旅光陰
 ハ百代の過客を即時席上小變化無窮み見る如く登り
 つ下りの須臾の夢手を拍つ音ハ一と答る音物を
 喰ふ音拳を打つ音螺の尻を捫る音笑ふ音怒る音血を
 破る音叱る音醉漢の尻を取外を音送る合せて樓の一

突出破雲三級樓
 客來客去不曾休
 東山吐月清尤好
 三十六峰歸寸眸

三級酒樓
 客來客去
 東山吐月
 三十六峰



大音聲ある所以あり
 山海の珍味水陸の奇品備つざる無く設けざる無一肉
 の林比如く酒の泉の如く手を拍てハ應ト物を命を
 む成る一も凝滞する事ふ一嗚呼都會の自由威樓の自
 在一も我意の如くあらざる者あ一我意の如くあらざ
 る者無く去て後我意の如くあらざる者あり我意の如
 くあらざる者有て後家倉山林田園の我所有あらざる
 者あり家倉山林田園の我所有あらざる者有て後自主
 自由の權我身の有らざる者あり者有り者有る者
 久一かゞと宜ある哉言や江湖の人希くハ夫れ之を
 節みせよ

機關的

半弓肆あり播山といひ金時といふ種々の機關を設て
 座興を添ふ其装置小的多敷を懸け中まバ則種々の形
 容を現む或ハ忽然天幕中よま措或ハ狸或ハ猫等を落
 一來るあり或ハ偶人人力車を挽く有り或ハ踊るあり
 或ハ座下廻板樞紐を設け中れバ則旋回するの機關何
 り或ハ座床迫上る事数尺ある者あり座人慄然色變ト
 衆愕然たり嗚呼都會は非んハ此機關を設る能らば此
 機關非んハ此奇遊を呈する能らば此奇遊は非んハ
 金を得る事多かゞと謂ひつる一商法の機關錢設け
 の樞柱産業の迫上を得たりと



繩伎

繩伎師早綱鯉之助當時最有名なり數丈竿頭一小横木
 を貫き此小登て伎を施す或ハ一足を横木に懸け頭首
 都て地に向ひ一足ハ横木を離れ斜に開て天に朝を其
 危き累卵の如く三味線鼓音其勢を助け看客胸膈震
 ふ或ハ腹心を竿頭より貼し身を俛し兩手兩足を放開し
 恰も龜を杭上より置く如く旋轉急回其疾き電の如く看
 客眼方小眩せんとして伎者扇を開て自若多り或ハ一小
 木に腰尻を安んじ張繩を以て之を釣り轆轤を以て高
 く捲上る事數丈其搖動鞅鞅の状をふし忽然地に向ふ
 て墮せんとして急に一足を横木に繋げ頭手倒し地向

ひ又一足を入ま替へ優然扇を開て餘地あるを示す想
 心見る一脚を誤る時ハ身體粉微塵となつて飛ん事を
 看客冷汗を流一口を開て瞳焉るり嗚呼伎藝世は多
 然りとつ共此伎の如く身を百尺竿頭よ寄る危き
 グ如き者あらば此危きよ比較セバ其他の業事何ぞ
 忌むなき者何ん何ぞ危き者あらん而して其體飛
 燕の柳小戯ふる如く百様千態猿猴且つ及むど精鍛熟
 錬工夫を積む者ハ非んぞ夫を誰れる能く是の如くか
 らんや一伎藝さ一猶然り況や聖人の大道を學ぶ者を
 や人にして中心を失ふ繩伎小も如どとせん乎然り
 とつ共繩伎の術聊脚を失ふは忽ち父母の遺體を



戦々競々幾苦
 辛不偏不倚最
 通神藝精堪感
 心堪賤百尺竿
 頭寄此身

結句假用古人之句

誤る故其術此精あるの感ドて賞を乞く其業の危き
ハ賤きて禁せし孟子亦曰く其術慎せんバ有るべか
らばと宜なる哉言や

癡人

癡人の癡人ある者あり金丸といひ花松といふ金丸ハ
陰囊腫脹其大さ恰も二三斗を入る囊の如し花松ハ口
無くして鼻穴を以て其用を便せ水を飲み歌を誑ひ温
鮎を吸込みポピンと吹等の外別小一奇藝ある小非
唯癡人の極を以て其客を釣る此を諺に所謂治極て亂
を生じ亂極て治を生じと僕亦いふ癡人極て糊口を生
じと嗚呼都會小非んを此癡を賣り此贅を銜ふて金を

得る能くは是亦一大繁昌の餘澤トいふべき歟

腫大陰囊兩股間

有鼻無口一平顔

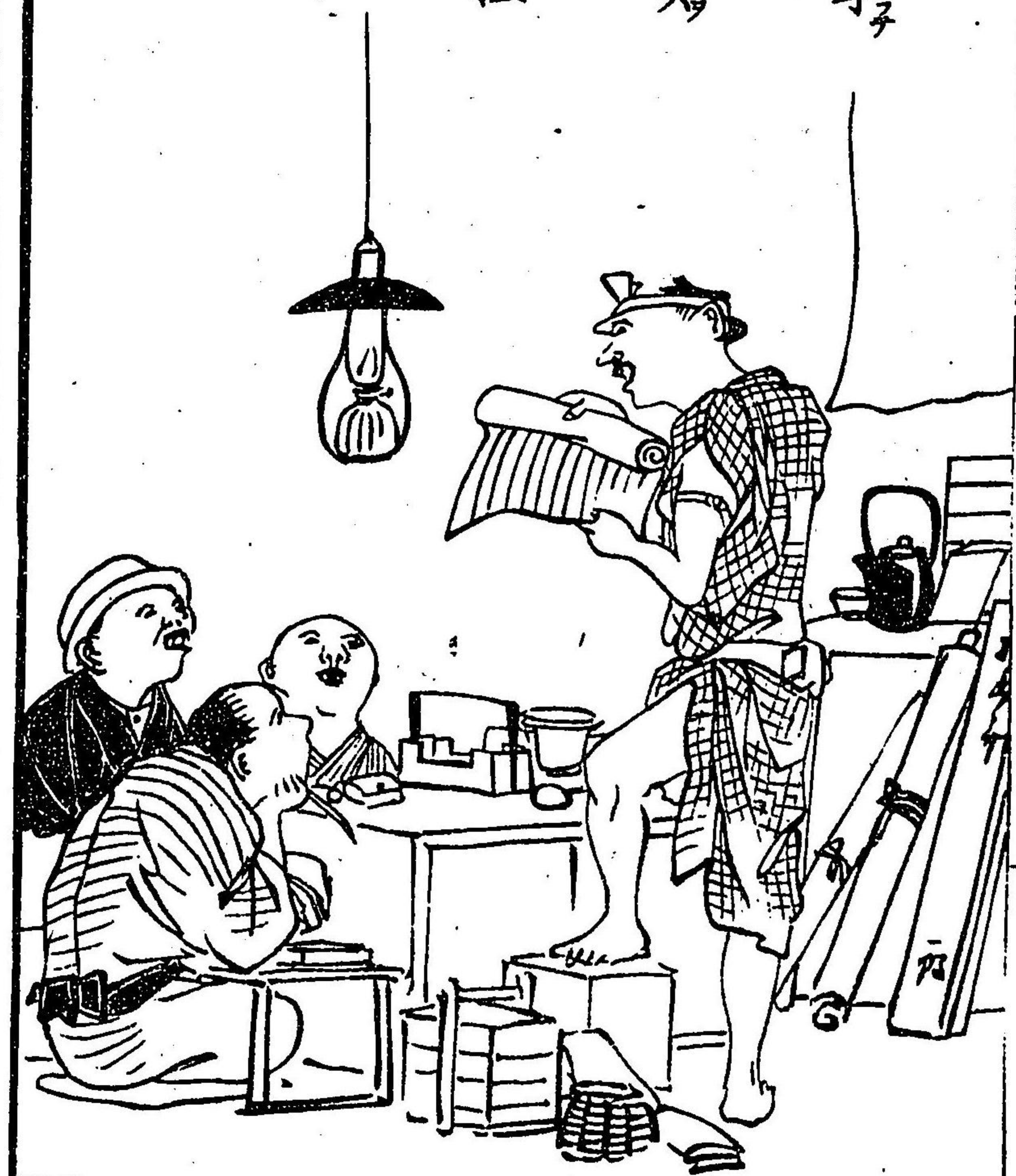
奇哉癡極誇生活

看客如雲錢似山

競市

競市ある者あり衣服骨董の類を銜ふ一人一物を提げ
或ハ赤鉢巻をサアナンボくサア一貫五百サア一貫
六百其物を捨り安いのちあサア一貫七百と敵を限り小
呼び叫ぶ往還の人一人をみ二人立ち三四五六と聚て
漸次小群聚利を競ひ勝を争ひ威氣生ト勢ひ付て田舎
者減多無性小高價迄調子に乗て競上り羝羊藩子觸ま
込で抜き刺しあしぬ進退小我慢の角や懐中の棒を打

物價相争
意氣豪
店頭街賃
勵敵號
田夫抗抵
如衆虎
破竹駁々
到最高



折り悔といふ

女義太夫

一場あり是ま女義太夫の輻湊る所太夫を梅吉花駒
初吉琴駒駒吉美駒小仲勝吉常松登女松春松房吉卯の
松ハ重吉小天といふ美人珠簾を捲き上て蛾眉を潛む
る別品等雲鬢花顔紅粉を粧ひ盡き出談りハ物いふ花
り諺の天人仙女の降りし西施も恥て揚貴妃も顔を
背らん其風情三弦取て身を構一搔き鳴らしたる愛興
ハ玉も盈るゝむかりなり其標題ハ種々無量一々枚舉
むるのらむ武智重次郎出陣より寺岡平右衛門の歸國
葛の葉の子別ま丹波與作の母子に會母政岡の子を歎

く祖父音近の孫を哀しむ力弥の祝言直實の法心まで
 舉ぐる無く述ぶる無く所謂狂言綺語も讚佛乘の法よ
 去て神祇釋教戀無常何を勸善懲惡の道は非る者のか
 其高床の樞柱を設け旋轉曲を續ぎ少間断の無らふ
 む粧ひ競ふ美女佳人麗服綺羅と輝一金絲銀絲の総下
 見臺前座と占て氣海丹田臍の下心治めて繰り出
 其精妙の音曲小看取を聴取を衆客の心わらき酔ふ
 如く彼の古歌もある天地の心は叶ふ調をよハ山の草
 木も動くぞかまそ草木さし動くぞありれ調ぶよハ人
 間何ぞ堪わづけん煥文新誌第廿二號ふ掲げある看容
 小仲が浄留理と其美色とふ驚き高場よと倒墜せしむ



二八佳人三五娘
 浄留理海藝林
 場抑揚頻挫
 張聲色天
 外魂飛遊
 冷郎

西天舞言
 初巻下
 二

虚假あり俗小所謂久米仙も女の脛比白き見て通を
失ふ譬つあり況や凡夫ハ無理からぬ事と思つど益も
あき者よ酔ふよ文明の學よ酔ふせん事を乞ふ

於多福店

門帷小於多福の面を画き酒食を賣る肆あり俗よ之を
オイシヨと呼ぶ頗る有名の肆店あり來客物を命だれ
バオイシヨくと答ふ店大あり此屋高かき質樸古風
を存し高名人口小贈炙し來客雜選踵を接ぐ

不與他家爭涓漚 依然存舊舊門庭

名流何絶淵源在 質樸古風多福亭

花遊軒

花遊軒是色一種の酒店あり庭園清觀眼を慰め神を樂
しむよ足る花遊軒の稱真は虚假あり其食味大不佳よ
志て價頗る廉あり客去り客來つて綿々絶つど手を拍
ち物を命して唯諾頻あり一醉雅興を取る謂ひつる一
種の風流店なりと

價廉饌美一名門 調理風流精妙存

珍草奇巖庭上秀 四時真是花遊軒

道場善哉餅

道場善哉餅別種の佳味あり多非びといひ共其名四方
不高く諸店を壓倒し遠境僻地の人といひ共西京よ來
て道場善哉餅を食つど他善哉餅を食ふといひ

共心よ飽らざるが如く飽け共食へらるる如く此を以て知るべし道場善哉餅の名遠近よ轟くを此小於て田舎人上京すれば必だ食ふ此を以て來客媚集膝を容ま腰を安むる處ふし來客待つ間厭ひつゝ手を拍ち急よ促せば去來奔走左顧右顧餅尻の大あるを取頬の赤きを蔽ふよ暇あらず其匆忙推して知るべく其繁昌亦推して知るべきあり

善哉商肆最流芳 來客雲蟻少與長

不識道場他有寺 場名如餅餅如場

二ハカ

二ハカハ俄然頓作の義ありて滑稽落語を以て體し

臨機應變を以て用ゝを其黨の言お曰二ハカハ庭神樂といふの義ありて古昔天照皇太神天の巖戸小隱ま玉ひ天地常聞とありし時曰女の尊庭お於て神樂を奏し神を涼しめ奉りし太神巖戸を開き覗き見玉ひ光輝顯るま面白かりし故事に因て二ハカといふと未だ其實是ありや否やを知らざれば親しく此場を見る曲藝數種中お就て安達が原三段目の變作あり謙文を結構と名付け濱夕を馬鹿勇といひ袖款を土手取といひ於君を畜みといふ其技の滑稽推して知るなり幸玉富士寶松玉大鶴おぐれ寶玉橋亀梅蝶といふ者を以て最とを奇辨雜言妙ふ人を以て絶倒せしむ願方よ機關を脱

せんらー臍將ふ茶を沸さんら一時的の愉快即席の一
笑人をして餘念を惹きめど煩惱を起さしめば謂つべ
ー淡泊無毒の一藝と

此是滑稽無盡藏 俄然頓作百機場

一時遊藝十分興 絶倒使人翻笑囊

親玉饅頭

大提燈ふ珠玉を圖一大阪新町出店と書くる者を以て
招牌とて風味殊よ佳ふして價頗る廉平素嚙ぐ所貳厘
五厘壹錢の品あり需よ應して五錢拾錢客の望む所あ
從えんといふ是新京極街中饅頭の別品ふして親玉の
稱真ふ虚假あはれと云

親玉饅頭殊卓然 形容風味着先鞭

傳聞其大從人乞 自二三錢到拾錢

喉藝

丸山新助といふ者あり腫物膿潰後其正は復せざり
乎其原由に分らざといひ共五軟骨邊は氣孔を開き其
氣孔ふて多數のホピンを吹き或ハ筒を水盤中を通
吹て波瀾を起し一欠或ハ吹矢を吹き或ハ吹き玉を吹
上或ハ口は横笛を吹きおがらホピンを吹く等種々
の藝術を行ふ者は是實事ふして決して著者の法螺を
吹くは非るふ

與口與喉一度吹 水筒横笛數玻璃

腫癰濃潰偶然孔 生計遂成是亦奇

小鳥の藝

剖葦或ハ鳩白蠟嘴等種々の小鳥を集め教ふる小技藝を以て一各々も小太夫の名を以てして衆客小見せしむ其藝の略も曰く少一高き所あり張り子の細ユ少一小倉より米俵を出し装置あり之を去る事四五尺ふして小鳥の籠を開けむ飛で其倉小入り張り子の小俵を啄み掛て滴投を介者呼で曰是せく太夫此貴寶の者妄小亂投をなせりしは數を定めて出せよといふ是より三俵五俵七俵或ハ左リ或ハ右と唯介者の命なる所より從ふ亦一奇あり其他張り子の虎或ハ熊おどを喙頭も掛

て左右へ投げ或ハ高處小鐘を設けて之を撞む其數亦介者の令より從ふ又百人一首の骨牌を取る亦人の命なる所より從ふて百其一を失せば嗚呼知慧よ乏しき小鳥も一て人言を以て通せざる教を受く妙と言はざる可んや其黨の言小曰く小鳥もよく能く人の教を聞く猶然り況や人間小於て多や人おいて人の教を受け之を習ひ之を覺ふ亦何の難き事乎是も有んや小學生徒の方々よ若し之を能くせざると云はば小鳥小だも如きとせん乎真し金言あり人亦此金言よ恥ざる可ん哉

覺數覺方又覺書

的然從命銳堪譽

丈夫修學若無識

當謂小禽曾不如

猫鼠同遊

猫の鼠を嗜好するハ其天性不出る者にして固より論
 ざるを待ば爰も反對の一場あり猫もあて數頭の鼠を
 抱き撫育親愛するの状あり鼠或ハ猫の背或ハ眉額小
 上るといハ共猫知らざるの状をかハ或ハ之を抱て愛
 するの態をかハ鼠も亦真ニ懐けるの風情ありて猫鼠
 互ハ恬として親和する者の如シ是元來猫性を恐喝
 壓制して反對せしむるの習慣不出る者にして奇ニ似
 て奇ありぞといハ共之を推して以て人心の習慣亦善
 惡の反對ハ分るを知るハ故ニ其教慎むんハ有る
 及うハ揚子路を見て哭シ墨子練絲を見て泣くと

宜ある哉

猫鼠敵讎皆所知

同遊親睦亦珍奇

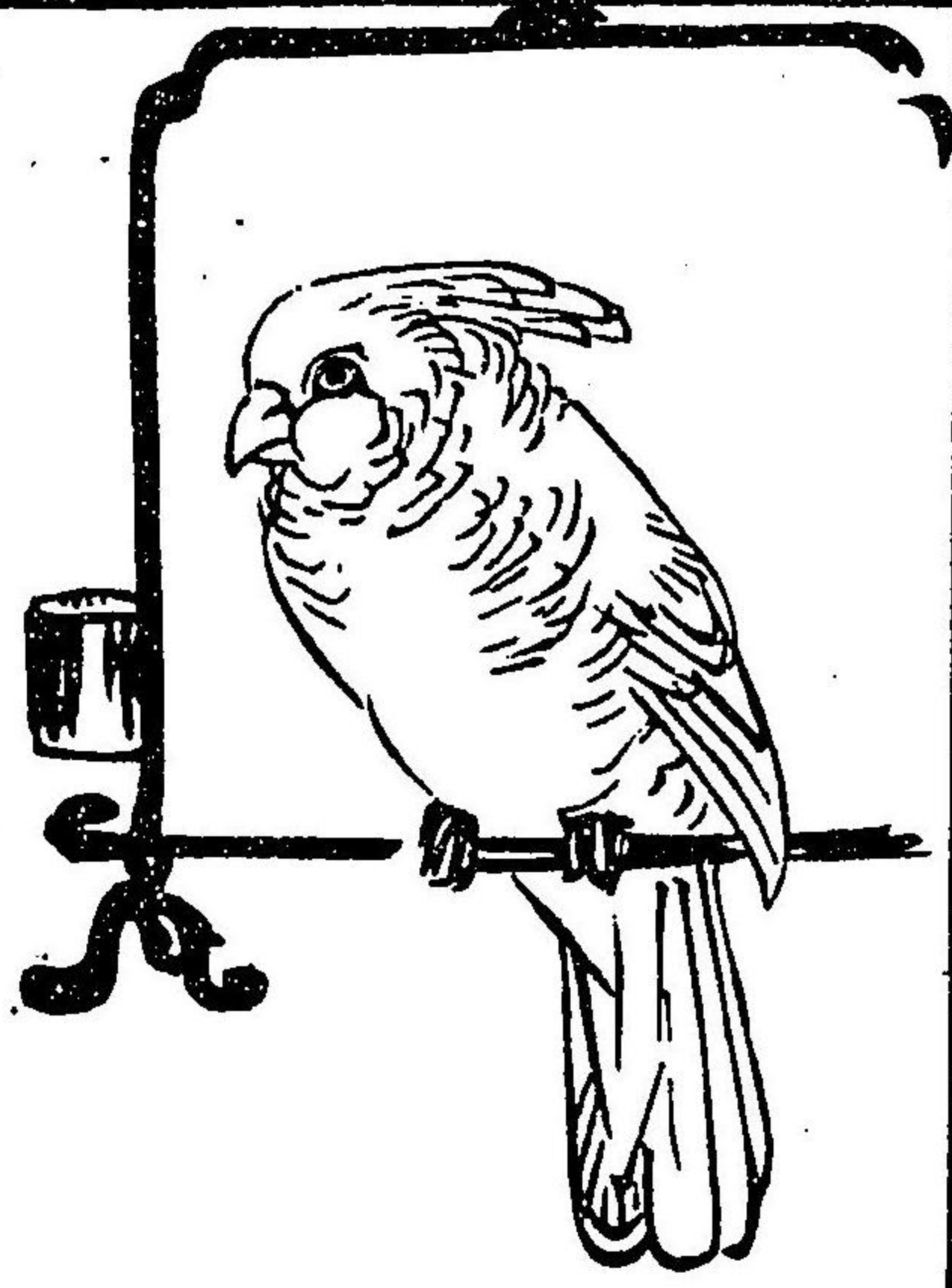
人間善惡淵源在

須慎習風為禍基

名鳥樓

名鳥樓と名付あり俗稱今津久六といハ肆頭小池を
 設け鴛鴦數頭を游泳せしめ別ニ小架を釣り鸚鵡を棲
 ちめて觀客を惹く鳥獸並ニ畜ふの中鳥特小多き小居
 る名鳥樓の專稱推して知る者珍奇數種あり皆其眼
 目を新し其博識を助る小足の中ニ就珍ある者ハ
 澳大利亞の岩穴に住む石鼠あり由一名カンコロウと
 して聞其大さ小犬の如シ店奴人ハ指示して立歩

之と説く未だ知らざる是ありや否や又鼠體の普通より
 大ふして我國の鼯は大小の如き者あり是も尾無き
 鼠より支那よりモロモツトと稱するといふ又強猪と
 唱へ其大さ猫の如くあり満身毛といふて可あらん
 乎石といふて可あらん乎其質細小石筆状の尖刺あり
 稠密叢毛の如し其動搖抵觸の響ガシヤリくと音なる
 を聞く其堅硬推して知るべし一朝怒て其毛を聳かき
 を誰ら犯す者有らんや真に奇物あり鳥に至ては孔雀
 ありホロク鳥あり七面鳥あり又インコウと唱る鳥あ
 り其色赤きあり青きあり其間錯の多き六七八色に至
 る極めて美鳥ふして其種類頗る多し又金鳩あり銀鳩



奇獸珍禽搜索周
 籠中自得轉相遊
 千聞下見存鴻益
 稱號不虛名鳥樓

あり朝鮮鳩あり孔雀鳩あり其類亦多し其他逆毛の鶏あり赤毛の矮鶏あり雉子と鶏の間小生る鳥あり大海白鳥と唱ふあり水汰鳥と稱るあり小判鳥と名付るあり白文鳥と呼ぶ者あり其他キウカニバクケレ鳥シマヒヨヘキ鳥キレハラヤタウサレジヤクヤクイカレ鳥白頭翁や竹林鳥や其他の奇禽珍鳥枚舉ふ違有らざるあり

嗚呼都會ふ非んば何ぞ此奇物を觀るを得んや都會ふ住せざんば何ぞ此繁昌を記すと得んや然らば則文ハ則拙しといへ共語ハ固よを陋しといへ共亦繁昌記者の列多を免らざる所ふして文の拙く語の陋し

さハ固より恥る不違ありざる所以あり江湖の君子僕の志よ同ト人此繁昌の遺漏を拾ひ此文此不足を補ひ了是正を加へ玉らん事を千萬伏して乞ふといふ

千歳屋緒環蒸

此店緒環蒸を以て高名あり并不蒸諸品を賣る風味佳ふして價亦廉あり客來り客去て連綿絶つざるハ方小其緒環を廻る如く謂ひつる一活計千歳屋不傳ふと

領得緒環風味馨

來賓蟬集滿門庭
左呼右命無違應 千歳當傳千歳亭

映画

映画ハ暗室の中燈光を以て其形影を映射せしむる者

毫も其彩色を失はば男女形影左顧右眷或ハ全背を現
 ト或ハ喜笑の態或ハ舞蹈の姿百機百出意の如シ其他
 禽獸の狀態花鳥の美麗山水の明媚小至るまで精巧其
 妙を窮め活潑其神不入る坐間真ニ其物小接シ其境小
 在るが如く亦一奇あり謂ひつる是れ亦西京繁昌の
 影画を寫シ出せりと

彩画玲瓏妙入神 變機百出各呈真

西京景况人知否 寫出繁昌餘影新

栗餅曲取

栗餅の曲取と唱ふる場あり一人の男子左手を搦たる
 栗餅を握り盆器を去る事一二丈而して捷手其栗餅を

握りあり手指間あて之を分ち團子の扁あるが如き大
 さとあり之を盆中よ抛ち或ハ亂投の間半途の中分れ
 て二つとなりて盆内に入り或ハ高く上り飛ち種々
 の曲藝を盡して聊粘着の状あく或ハ二つ或ハ三つ快
 手之を運ぶ恰も翹々として胡蝶の舞ふ如く或ハ身を
 仰ぎ頭を垂き逆ニ之を投る事連綿蝗の飛ぶが如く小
 あて百一を失せざる等の妙藝奇能其曲取りの名稱真
 不虛假ありま嗚呼文明の盛ある藝其藝を盡し曲其曲
 を窮む精煉の苦感せざんば有るはうらやま之も反ざる
 遊客治郎家業嫌ひの晝寝好む懐手して牡丹餅を夢不
 喰ふより外ハあく濡き手で栗り濡れぬ手で栗餅喰ふ

氣取でも此粟餅の曲取の勉強人よ比較せハ月鼈氷炭
提燈と釣鐘程の反對で手持ち無沙汰で尻餅を搗ねバ
あゝび身代の長持所ら目前先祖の家業草創も水の
粟餅尻とあつてブスくと消え失せて消えざる者ハ
不孝の名身上潰し馬鹿者の臭みハせ々よ遺るあり江
湖の君子須く文明の的外さとと稟ト々怪々引絞る心の
弓小志氣の矢を番ひ放とぞ躍如たる鶯を崩まぬ満月
の彼の古句ふある誰まも見よ満まハ頓て缺く月の十
六夜の空や人の世の中ある事を氣海丹田臍の下篤と
納めて放ちあハ百發百中狂ひあく道の正の理の至中
何ぞ外まの有るぞや之よ反して川柳の本同家後不

和とある餅と酒不和を媒して我口ハ和睦を謀る餅と
酒雨風ゴザレの下戸上戸附合ひ自慢の喰ひ抜け身上
飲で胃を損ト粟餅さつも喰へどあり留飲持ちや積氣
持ち醫者ハ土持ち此る勿ま

曲技如神精妙存 文明深處轉乾坤
殊驚餅子連技際 半道中分入一盃

寫真店

寫真店あり真影眼を驚し清潔神を爽お其種千様一
あゝだ萬態風を異お中よ就て青松翠滴らんと欲し
波濤起伏る者ハ山水相映るの寫真かり雲鬢花顏
明眸秋水と凝らし朱唇皓齒活る如く笑ふ如キ者

ハ麗人の寫真ふり堂塔雲霄小冲り宮殿林壑小出る者
 の神社佛閣の寫真ふり容貌堂々威風凜凜々俊秀面々顯
 られ或ハ威有て猛かゝざる者ハ英雄豪傑の寫真あり
 或ハ甲冑を着し或ハ髻鬟を頂き或ハ婦女の形容と比
 擬する者ハ俳優の寫真あり其他鳥獸魚蟲の微より天
 象地球の秋小至る迄寫さざる無く具へざる無一抑寫
 眞の妙一寫眞影を印し嗚呼文明の進歩精其精を窮め
 細其細を極む天下の勝景一店小聚り古今の英姿一掌
 小會を豈奇と云はざる可んや豈妙と云はざる可んや
 然り而して千歳其芳を慕ひ萬古鬼神を泣くむる者ハ
 徒小浮虚の艶色美容小非ぞして唯心上の節操徳義小

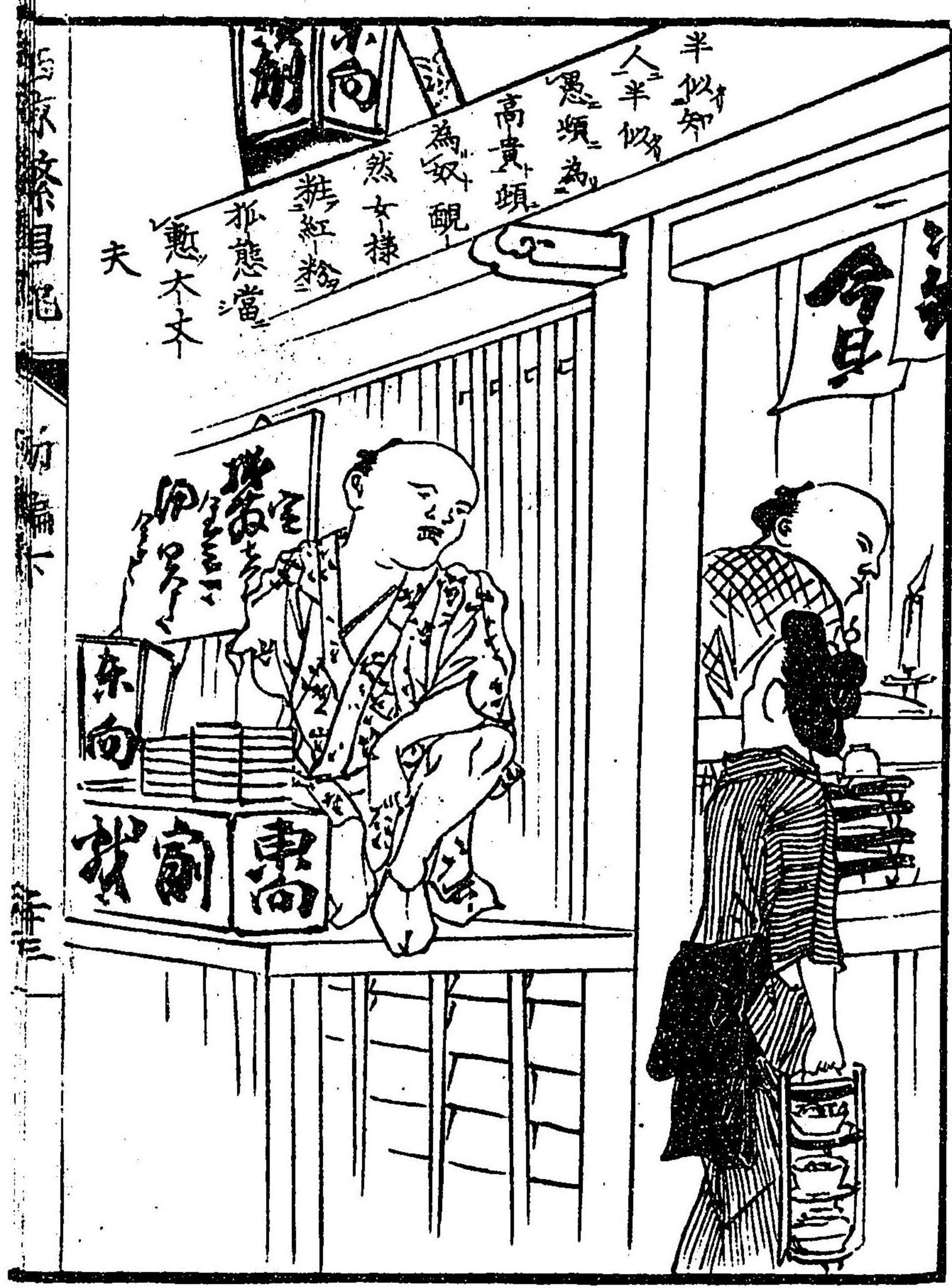
因る而已矣是れ忠精義烈家の眞影長く世に傳へ人の
 賞むる所以あり慎むる可んや鑒みざる可ん哉

文明開化逐時新 分析存精捕影眞
 寫取乾坤奇絶景 萬觀收得一場春

演劇

演劇ハ今見る所新京極街中東向きと道場と二場あり
 俳優人の尾上梅朝市川福太郎尾上多三郎坂東芝鬼藏
 嵐重三郎中村歌之助等を以て最と比外小首振り唱
 ふる者あり是れ優人故小口を嚙ト無言もて其淨留理
 の曲節は従ふて頭頸を振ひ四支を動し飛舞旋轉其態
 藝を盡す者亦一奇あり然りとて共其狀亞は類似し

て困悶窮屈隔障搔痒の歎無き小非を因て此小贅せど
 戶外味券を賣り空觀せしめざるの證とに其賣る者奴
 あり婦女ありサアオハイリヤスく唯今幕開きサアオ
 ハイリヤスくと頻り小呼で看客を鼓舞せ是未だ開
 りざるも殆ど將小開かんとするの意も轉通し既小開
 いて其態藝將終らんとするも實小其幕開きの詞も
 背の蓋し一舉兩得狡黠の呼び敷なり場の正面舞臺
 を設け種々の器械を裝置し藝小從ふて變化し或ハ樞
 柱を設け器械旋轉交替忽然一新境を出現し來る場三
 四尺四方小局する恰も碁局狀の如し左右高棚を架し
 其直下頗る局を高くし觀望し便之を高場といふ高



西京舞臺記

初編下

三

場の傍舞臺へ通じる一路あり俗之を花道といふ横小
引多る天幕ハ晴まざる小何の虹ぞ縦に渡りたる棟ハ
雲あらざる小何の龍ぞ鉤竝ぶとる紅燈ハ瑤瑤の降る
疑ひ麗人の輻湊するハ天女の會すると認む紅粉の
然眼を奪ひ頭飾煥然光輝を發せ扇の閃くハ胡蝶の如
く笑ひ語るハ花の如く折鳴て幕を開く雜子方三味線
を弾き歌を謡ふ看客喧嘩頃止み眼を張て舞臺を現
ふ其眼爛々星の如く所謂鵝の眼鷹の目比狀あり
無官大夫敦威扇屋上総内小潜で女様を爲し小教と呼
ぶ家の娘桂子其實を知て之に戀慕を小教辭して曰く
女ふして女を戀ふ知らば君夫れ閨中を如何んと看客

絶倒モ時小一人の英傑深編笠小面を蔽ひ朱鞞の大小
をさし黒羅紗の燕尾皮金襴小黒天鷲絨の縁取たる野
袴を着し來つて陣扇を求る所へ捕手來つて敦威を詮
索し小教を怪し懐へ手を入を乳を改んとするを前
の士捕手を投る指を舞せばコロリと翻る二度舞せ
ハ二度翻る或ハ早る捕手共指も出さぬハ二度翻る手
煉過たる拍子抜け捕手怒て名乗れといふ彼士然らバ
名乗て聞せんと深編笠を脱きあがら四方に響く大音
殿武藏の國の住人私の黨の旗頭熊谷次郎丹治直實と
聞て驚愕する捕手去ま共跡へ退き難く互に詮議争ひ
とあつて熊谷敦威の詮議受取り上総に目禁し敦威の

首打つといふ詞の下小桂子の首身代りも打あめて實
檢終り兩親の愁歎濟で幕と多し其幕落て加茂川の流
きも清き三十六峰現出―新鮮美觀の景とあり眼を驚
そ大装置時小熊谷郎黨等主人出陣供の爲め六具々々
小身を固め主の黒馬を牽來る馬ハ男子の兩人が馬の
真似して前足とあり後足も勇しく人よ牽れて前足を
揚げ後足を躍らして頭額を伸つ縮めは揚々然と出
來る真よ活馬の如くあり然りとて共人よして馬態
をあり心よ之を甘んぢる其微小志ハ賤むづく其文盲
ハ憐むづ一人ありて馬態を爲せ豈人カ車牽ふも如
とせんり忽見る直實左右の衣を祖き絞り上る野袴

の紐を解けハ悉く六具ハ變ト黒馬ハ閃りと跨り日の
丸の陣扇開き身構へる此方の敦盛同様小左右一度
小祖げハ是れ亦緋威鎧ハ變ト四邊羞明き其風情互
威風凛々と再會期して去るで幕
田舎人あり毛氈を見て買せんといふ人其故を問ふ答
へて曰人切らきて死毛氈を以て蔽ハ生く咒と
る乎薬とある乎我ま毛氈を買歸り土産とありて故郷
の金瘡で死ぬ人々を助んといふ聞人抱腹絶倒去
古歌小泣ぞいて泣く真似とて泣あらら泣ぬ顔
劇場見物と嗚呼男子小―了女様を學び紅粉を粧ひ人
を誰かハ優人假令婦女子の愛を受る共豈獨内心ハ慙

西京繁昌記

刀編

三

ざらんや之を觀る者於亦然り彼の優の男ふ
女多しざるといひ明も知て女と認め鬢着て紅粉を塗り
眉を画き六七十の老優も少女も化て看客を誑かす
甘んじて泣きつ笑ひつる事忠孝貞烈天性も根ざ
るといへど到底に狐狸小魅せらる如くや何ぞ聖賢大丈
夫嗜好あまき業あらんや世上の婦女子優人を愛
る正し其父母を慕ふが如く戀着の優人死なれば則法
然涕泣恰も其考妣を喪はるが如し豈亦之を美とせん
や僕竊も思ふ今小學校男女の生負漸次年を経バ劇場
の狐狸人民を誑惑するが如きの場たるを知り優人亦
文明も化せしき羞惡の心を生ト男子の一丈夫あし

苟も女様をおして彼の所謂泣びて泣く真似たる詭
詐の術をおはを慚愧各自厭倦を生ト漸次觀客減少
優人亦虚戲の業を轉トて實職に就き戲場禁ざり
て自ら止む時あらん此小到了文明更小一層の文明を
加へ開化又一段の開化を進むる者にして全國虚飾の
人ハ無く明て日出度新年の春ハ梅花の玉ハ肌雪の中
とと綻ぶる清き操の額郁と薫まる枝ハ軒端ハ初音
も勻ふ鶯の朝日ハ窓ハ福壽草霞駿く四方ハ山鳥も
輪をおは長閑ある空を數千の揚雲雀優しき絲と繰り
出さ柳の枝小いゆり氣も直る小風ハ散る雫ををれて
見ゆる海棠の姿美し夫とらりも世界無比類かとい

ふ日本一の櫻花雲う雪かゝ咲亂ま爛熳るるハ實ニ花
 の玉といふなき風情かり惜めど限り有る花の彼の古
 歌ふある惜るゝ時散ておる世の中の花も花あり人
 人早春過て復來り雲井名高き時鳥江戸染さへも及ど
 る杜若も劣らと紫匂ふ藤の花泥も染ぬ清潔の
 蓮を心の鏡小了寫して見せん清水影朝日の様も咲く
 牡丹眠氣の覺る新茶も心養ふ夕涼み既小秋の氣立
 つと見へホロリと落る桐一葉垣根小散らぬ力ら持つ
 誠咲き立つ薺の庭小賑ひ鳴く蟲の散りかゝるも聊
 る盛り崩さぬ萩の花月よ輝く露の玉玉の数より最多
 き詩賦文人の月を見て心の錦筆先の花と咲せて東籬

ふる菊の清さ小淵明の隠逸心の慕もれて誰とも故郷
 へ歸る雁早冬枯まとかりぬまば木枯し落葉見る毎
 飛花落葉の世を觀ト身も霜雪と消へぬ間小切磋琢磨
 小撓まよと日本全國遐陬迄争ひ進む御維新の鴻業成
 熟遺漏無く善盡き美盡く
 王政の大確徴と爲る可き

明治西京繁昌記初編下終

新撰

五

東西々謹て言上仕りまは此書の義へ西京神佛の光榮肆店の隆威
 技藝の精妙を迷なまはたる者少いて實は繁昌の海とも山とも
 申し盡し難きと増山氏の筆頭小依頼し先づ新嘉極通りの繁
 昌より筆を下し始めますれ四方の看官愛顧を垂れしは護免の
 日よりも福井の福徳源富りよと汲出し買上げ利益ハ大谷廣
 かる程迄仁意を仰ぎて我まも已まもと御光車賜り或ハ江
 湖の登京の人々家郷の土産に購ひ玉ひて四神相應山水明媚の平安
 安樂京城城地の富盛の景況一目瞭然歌人の居るが名所を知るとの昔の事
 小て歌人よ限らば文明世界の居あつた都會と一手に握りて閑玉へと乞ふ者の



京都三條通寺町東入 福井源次郎
 同 通御幸町角 大谷仁兵衛

明治九年十二月四日御届
 明治十年三月出板發兌

編輯者 增山守正
京都府貫屬士族

丹波國何鹿郡綾部坪内村五百九十二番地

京都 出板人 大谷仁兵衛
京都府下平民

下京第五區辨慶石町五千六番地

書林 出板人 福井源次郎
京都府下平民

下京第六區石橋町二千番地



